

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財

(51)

ヒロハチシヤノキ

(国指定天然記念物)

樹高十五・三メートル 根回り九・七メートル

太宰府天満宮境内

天満宮の本殿の裏手、西北隅に建つ休憩所のそばで枝を広げています。もう道路に近いところでは、大正三年の落雷のために、幹の上部は折れて枯れましたが、周りから出た枝が四方に伸び、高さ十五メートル、枝張りも南北で十五メートルにも及ぶ、全国一の巨樹となっています。

ヒロハチシヤノキはチシヤノキの変種で、葉が広く大きいものです。チシヤノキは樹の肌や葉がカキノキに似ているので別名カキノキダマシとも呼ばれ、日本では九州や四国の低地に生える落葉樹です。初夏のころ、枝の先に円錐状に白く細かい花をつけます。

ところでチシヤノキの材は、乾

燥に強く、ひび割れや曲がりが少ないため、高級な建築材・家具材として使われる一方、銃床としても使用されています。このため第二次大戦中には、ずい分伐採されてしまいました。この木がいつまでも豊かに葉を繁らせることができる世が続くことを祈らずにはおられません。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財 ⑤2

天満宮の石造鳥居

(県指定文化財)

総高六・四尺 柱間五・八八尺

所在太宰府天満宮

参道をのぼって、太鼓橋の方へ曲がるとすぐこの鳥居があります。普通の鳥居より横広い印象を受ける形をしています。

造られた時代ははっきりしていませんが、形態などから鎌倉時代末期か南北朝時代くらいまで遡れるのではないかとわれています。

また、明治四年に書かれた天満宮の『神社明細図書』によると、「筑後国有坂城主新田大炊介建築」とあります。筑後国有坂というのは鯉坂(味坂)現在の小郡市南部)の間違いではないかといわれており、鯉坂であれば鎌倉末期、太宰府天満宮安楽寺領が置かれていた所です。

新田氏については、南北朝時代に今川了俊が出した文書に、二度ほど現われており、筑後国の住人と考えても無理はないようです。以上のことから、この鳥居は、鎌倉末期から南北朝ごろ、筑後国にいた新田氏によって寄進されたと推定しても矛盾はないように思われます。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の文化財 ⑤③

太宰府天満宮文書
附境内図(重要文化財)

太宰府天満宮所蔵

太宰府天満宮文書とは、宮司家ならびに諸社家に伝わって来た文書の総称です。その内訳内容は、(1)宮司家文書―天満宮安楽寺別当大鳥居家(現在の西高辻宮司家)に保管伝来された文書です。一番古くは平安期のもの一通あり、他に主なものは、後醍醐天皇綸旨、今川了俊・少弐・大内・大友・島津・黒田氏などの鎌倉から江戸時代にわたる文書、天満宮安楽寺領荘園史料「天満宮安楽寺草創日記」縁起・境内図などがあります。(2)小鳥居文書―五别当の一つ小鳥居家(現在の権宮司家)に伝来。(3)満盛院文書―三宮師・満盛院に伝来。大内氏関係が多い。(4)御供屋文書―五别当の一つ御供屋に伝来。今川了俊、大内氏関係が多い。(5)上座坊文書―安楽寺公文所(三綱)上座坊に伝来。

以上、これらの文書は、太宰府天満宮はもちろん、鎌倉期以降の九州の歴史を考えるうえで大変重要な史料となっています。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の 文化財の 54

石造狛犬一对

(重要文化財)
鎌倉時代 観世音寺蔵

現在、神社に行くと石で造られた一对の獅子のよ
うな像が、参道の両側にたっているのを、よく目に
されると思います。それが狛犬こまぬいです。

狛犬の起源は遠くエジプト・ペルシャのライオン
像にまで遡さかのぼるといわれていますが、それが中国で唐
風の獅子になり、その形が朝鮮半島を経て日本に伝
えられたとされています。狛犬の名は、朝鮮半島の
ことを高麗(こま、狗)とも呼んだことから出てお
り、寺社の前庭や縁側に置かれ、守護神の役割を果
たしています。

形は、左右一对が原則で、阿あ(開口) 吽うん(閉口)
や角を一本つけたもの、前肢をふんばったものなど
様々で、材料も木造や石造、金属、陶製などいろい
ろですが、この観世音寺の狛犬は石造で、阿形(写
真左)は右前足で手毬を押さえ、吽形は兎獅子を抱
く、子持・玉取獅子の姿につくられています。

この形式は、鎌倉時代初めに中国から伝来した宋
風の石造狛犬の系統に属し、近くでは宗像大社の狛
犬がよく知られています。



市政だより

太宰府

NO. 439

平成元 12.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです

太宰府の文化財 55

木造阿弥陀如来立像

(重要文化財)

像高一六七・三センチ
平安時代
アレッこんな仏様が観世音寺に
あったかなと思われる人も多いと
思います。そうです。現在、東京
檜材一木造
観世音寺蔵

国立博物館に九州を代表する仏像として出陳されているので、日ごろ太宰府で目にするとはできません。

阿弥陀如来は西方極楽浄土にいて、一切の衆生を救うという仏様です。見る人に重厚な印象を与えるこ

の像は、檜の一木造で、はっきりした目鼻だち、鋭く刻み込まれた衣の襷など、一種の厳しさを備えた独特の個性を持っています。すぐれた技術で、このような個性豊かな像をつくり上げた仏師の存在に、当時の北部九州の文化の高さがしのべれます。



題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財 56

筑前国分寺跡

(国指定史跡)

大字国分所在

全宇宙に遣わされた釈迦たちが人々を教え導き、毘盧舎那仏の世界に集うことを願った聖武天皇は、東大寺の大仏（毘盧舎那仏）を中心に全国に釈迦如来を本尊とする寺を建てることを発願しました。

天平十三年（七四一）、詔が出され、全国六十余国に国分寺（金光明四天王護国寺）、国分尼寺（法華滅罪之寺）が建てられました。ここ筑前国にも、大宰府政庁から北西約一キロメートルの地に国分寺、そこから西三百メートルの所に尼寺が造られています。

尼寺は、はっきりした寺域がわかっていませんが、筑前国分寺の方は、現在の真言宗国分寺が建つ所が金堂跡で、その北側に講堂跡、東南に塔跡が残っています。

写真の礎石は塔の心礎で、これから推定される塔は、詔のとおり七重塔だとしても不思議ではないくらい、大きく立派な心礎です。

今後まだまだ調査研究の余地はありますが、筑前国分寺は九州各国に建てられた国分寺の中心的存在であったかと推測されています。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財

(57)

飛梅柵擬宝珠 六個

(県指定有形文化財)

銅製 高一六・七センチ 胴径十二・八センチ

附 釘かくし 十六個

桃山時代 太宰府天満宮所蔵

本殿の前にある飛梅は、参詣の人々に最も親しい木です。その飛梅を囲む忌垣の柱の頭に付けられた宝珠形の飾りが、擬宝珠です。

写真の擬宝珠には次のような銘文が刻まれています。

「天満宮 願主 大鳥居 東市正信昌 天正十七年二月日 作柳井与助(以下別筆)再興願主 同信謙 慶長七霜月日」

つまり天正十七年(一五八九)に留守別当大鳥居東市正信昌を願主として柳井与助という鋳物師が造ったもので、慶長七年(一六〇二)ごろ、柵を造り替えた時にでも、再興以下の銘文を加えたものでしょう。

釘かくしは、梅鉢形の金具で、柱ごとに計十六個打たれています。

天正十七年は小早川隆景が本殿の造営を始めたころ、慶長七年は黒田如水が境内に隠棲していたころです。

現在、これらは宝物館に保存され、飛梅柵にはこれにまねて新造された擬宝珠が付けられています。



市政だより

太宰府

NO. 444

平成2

3.1

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の

文化財の

55

58

木造狛犬一对

(県指定文化財)

像高九十センチメートル クス一木造

室町時代 竈門神社蔵

昨年十一月号では観世音寺の石造狛犬を取り上げましたが、今回は竈門神社の狛犬です。

こちらはクスの木で造られ、形も毬や児獅子を抱く宋風の狛犬と異なっており、前肢をふんばり、現在は残っていませんが、吽形（写真左）の頭には角が一本生えているという姿でした。阿形（写真右）の顔の一部や足などに破損が見られますが、それを補って余りある迫力・量感を今に伝えていきます。

この狛犬の由緒は、吽形の胎内に書かれた「永禪作（者）」と、同じく同社に伝わる獅子頭の眉裏墨書銘「江州 永禪作 宝満下宮大宰少貳殿」「文明三年卯六月七日」から想像されます。すなわち作者永禪は江州（今の滋賀県）の人で、文明三年（一四七二）ころ、大宰府で少貳政資奉納の獅子頭を造り、またこの狛犬も造ったと思われます。永禪は神社の器物などを造るために当地に招かれていたのでしょう。

この狛犬や獅子頭は当時の仏師・工人の移動や、それに伴う技術や文化の伝播を考える上で、とても興味深い作品といえます。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



筆洗

太宰府の文化財

56
59

筆洗 一個

幅四十五・四センチ、長さ百六センチ、高さ七十センチ

印材 三個 一揃い

幅・長さ各十センチ、高さ二十五センチ

県指定有形文化財 宮小路賀宏氏蔵

筆洗・印材は明治時代の書家として有名な宮小路康文（浩潮）の遺品です。

筆洗は明治二十三年、帝国議事堂の扁額「帝国議會」を、印材はその扁額が焼けたので、明治二十



印材

七年に再び揮毫した時に、貴族院・衆議院の両院からお礼として贈られたものです。

筆洗は中国製古銅器で、本来は匱と呼ばれる祭祀用の器です。匱はご覧のとおり、注ぎ口と反対側に把手をつけた水注し形の容器で、祭りの時に最も貴重な酒とされた黒キビの酒と、それに香りをつける香草の煮汁を混ぜて、清めのために注ぐ時に使われました。

印材は、中国の寿山石製で、獅子のつまみが付いています。

宮小路康文は、文政九年（一八二六）に夜須で生まれ、二十六歳の時、天満宮の衆徒六度寺の住持となりますが、明治維新後は還俗して、宮小路康文、号を浩潮と称しました。書家として名を成し、前記の「帝国議會」の他、平安神宮の「應天門」の扁額、近くでは市役所の市議会議場入口の「議事堂」、筑紫農協の「蔵輝」などを揮毫しています。

題字「太宰府」は国宝翰苑よりその字体を集録したものです



太宰府の 文化財

銅製天蓋光心
(重要文化財)

外径三八・八センチ 縁厚〇・四〇・七センチ

観世音寺蔵

お寺へ行くと、仏様の頭上に天井からきらびやかな覆いが下がっているのを目にされると思えます。玉や金銀の飾りが下がるカサというか、仏様用の飾り屋根とでもいえばいいでしょうか。それが天蓋です。

観世音寺に伝わるものは、その天蓋の中心に位置する光心の部分と思われます。

八弁の花びらの形をした銅板の中央に銅鏡をはめ込み、表側は鏡のようにきれいに磨かれています。

上の写真は裏側です。中央の銅鏡は、直径二〇センチの唐式鏡で、めでたい文字や絵が書かれていますことから瑞図鑑とよばれているものです。周囲の銅板部分に鉄棒を十字（現在は一本のみ残る）に通し、これで天蓋本体に取り付けていたと思われます。

現在では光心のみ伝わるだけです。天蓋の全体の形、またどの仏様の頭上に懸っていたか、残念ながら知ることはできません。